

(書評) 『近藤寿市郎伝——豊川用水と東三河百年を構想した男』  
 嶋津隆文著、公職研、2018年5月

椋 村 愛 子

本書は、近藤寿市郎生誕150年に、彼の築いた豊川用水50周年を記念して著されたものである。著者嶋津隆文は、昭和22年渥美半島生まれで、東京都庁勤務後、松蔭大観光文化学部教授、田原市教育長を経、現在愛知大学三遠南信センター研究員である地域史家である。著者は、東三河の郷土史として、著者の祖父で伊良湖岬村村長の嶋津十文字、福江出身で成田空港問題を収束したとされる山本雄二郎、田原出身でボタニカルアートのわが国の第一人者とされる太田洋愛についてこれまで伝記を著しており、本書は著者いわく「締めくり」の第四作目の著書となる。

嶋津氏は豊川用水通水50周年に向けて2年前に本書の執筆を開始し、近藤寿市郎が用水の着想を得たインドネシアにも足を運んだ他、寿市郎の孫の近藤素夫さんら関係者50人に聞き取りをし、生の声をもとに寿市郎の人物像と業績を立体的に描き出した(中日新聞2018年6月6日朝刊東三河版12p)。

本書には、随所に寿市郎の自伝『今昔物語』の引用が現れる。寿市郎自身、自らの足跡を地域の歴史とともに晩年に記録として残そうとし、昭和16年に『三河憲政資料』を編纂(板垣退助の『自由党史』の三河版として作成を進めたと伝えられる)し、その後昭和33年藍綬褒章を受章した折に地元紙の『不二タイムス』(現在の東日新聞)に「87年を語る」として連載したものを刊行したのが『今

昔物語』であった。本書は『今昔物語』をベースとしているが、個性的な寿市郎は自由奔放に行動し、家族のことはあまり語らず、戦後公職追放後の記録が少ない等の欠落を、周囲の取材と嶋津の解釈によって埋めたものであり、嶋津の与える文脈と解釈は寿市郎の像を生き生きと浮かび上がらせて、一つの近藤寿市郎論となっている。

近藤寿市郎は、1870年(明治3年)に渥美郡高松村(現田原市赤羽根町高松)で代々庄屋を担う裕福な家に生まれ、県会議員、衆院議員、(第12代)豊橋市長と、地域の政治家として、また中央と地域のパイプ役もこなした、明治期に見られるスケールの大きい人物であった。

この地域を水の困難から救い、田原市を市町村別農業産出額日本一にした、豊川用水を作った地域の偉人であるが、あまりに壮大な国家プロジェクトとしての豊川用水は、「こんじゅ(地域の人はこのように呼んだ)の三大ほら」の筆頭であった。1960年(昭和35年)、彼はその開通に生涯をかけた豊川用水の完成を見る前に亡くなっている。大きな河川がないことで常に渇水に悩まされていた渥美半島は、農業に適さない赤土の荒地が広がる農業困難地域であり、貧困のため住民は食い詰め、海外移民計画も企図されていたほどだった。

悲願としての豊川用水は、そこに「北海道」が広がっているとされた不毛で広大な軍用地

跡（軍施設の誘致によって人口が増加し都市として拡大した豊橋であるが、寿市郎が構想した昭和初期の豊川用水構想にとっては、軍施設は開墾計画具体化の大きな壁だったと嶋津は指摘している。87p）となり戦後の緊急事業として開墾農民が入った地域を、通水により全国屈指の農業地帯へと変貌させた。

豊川用水の計画自体は、寿市郎が大正10年に視察したオランダ領インドネシア・ジャワ島の灌漑用水から着眼したものだが、周りに一笑されたこの計画は、結局着工については戦後まで待つこととなり、戦後の飢餓危機の中、食糧増産の期待を担って昭和24年宇連ダムの建設工事から開始され、19年の歳月と480億が投じられて昭和43年に完成した。

寿市郎が亡くなった時には、等身大の彼の銅像が赤岩山に立てられた。しかし地域の児童文学『水の歌』（昭和56年刊）でも主題となっている「通水の喜び」についての人々の記憶も時と共に薄れていき、今では大規模農業化のもとで小さい農家はこの地域でも消滅しつつある中、嶋津は寿市郎の記憶を再確認すると共に、地域の歴史とありようを再考しようとした。

私は、日本近代史研究者や政治学者ではないので、本書の資料としての価値や地域の近代史研究の観点から本書を学問的に分析することはできない。当事の民権運動や東三河の政治・社会的文脈についての分析と、それが寿市郎本人にとってどのように認識され、さらにはこれらが伊良湖岬村村長を祖父に持ち田原教育長を務めた嶋津にどのように認識され、そして2018年豊川用水50周年を記念してさまざまな行事やこれを翻案とする演劇が上演された豊橋・田原にとってどのように認識されたかを、言説分析等を通して社会学的に分析するところに私の問題意識がある。とはいえそもそも歴史とは、現在生きる人との関係でこそ記述されるものでもある。

本書の構成については、1-6章で、寿市郎が維新の緊張感あふれる空気と自由民権運動の影響の下で、15歳で東京に向かい、明治法律学校（現明治大学）に入学するものの、数ヶ月で郷里に連れ戻され、高松村役場に勤めながら、やがて政治家となり、豊川用水を構想し実現していく生涯が描かれている。7-8章は、「こんじゅ（近藤寿市郎）の三大ほら」とされた「豊川用水」「三河港」「赤羽港」にまつわる記述である。

前半では、嶋津は、寿市郎が大きな影響を受け最愛の師とした地元の民権運動家村松愛蔵についても救世軍を尋ねて取材し書いている。疑獄事件後、政界を引退し、救世軍に生涯を捧げ、郷里での政界復帰を強訴される中、一度も郷里に戻らなかった、そして寿市郎に最も影響を与えた、この自由民権家の数奇な人生が記述されている。政治家の世襲が目立つ現在とは異なる、当事の政治家たちのダイナミックな生き方と志が垣間見える箇所である。その他、寿市郎が村長職も警察も辞退して政治家を自認したいきさつ、新聞記者としての活躍、政治家としてのキャリアが描かれていく。

後半は、東京臨海開発調整課長や下河辺淳がNIRAの理事長をしていたときの主任研究員を務めていた嶋津自身、開発に関わる中央・地方の官僚・政治家の関係を熟知しているため、寿市郎の事業をこの観点で分析する秀逸な考察が展開される。また、日本社会を100年の計において構想する政治家と官僚の幸福だった時代を多少ノスタルジックにも描いている。しかし著者は今の時代においても長期的な視野を持つ政治の必要性を訴えたい思いでこの書を著した。大開発時代と、持続可能性や環境負荷、地域のエネルギーと情報の分散と自律を志向する現代とは、相当当時の地域政治の枠組みは異なる。が一方で厳しくなる環境問題に真っ向から取り組むには、当時のような大胆な発想と政治力が必要であ

るだろう。

本書は、寿市郎の人生について著者の幅広い知識によって周りの様々な人々の記述から寿市郎を浮かび上がらせる手法を取っているが、その他にも「窓」とされる、文章中に挿入された多くのコラムにおいて、当事の歴史的な事項や制度と、歴史の中の市井の人々の姿を描いている。

その一つに、終戦時にソ連軍が侵攻した(北)朝鮮から逃げ帰りこの地域に開拓民として子どもたちと入植した松崎賢二(帰国前、大陸の収容施設で妻を失う)が、苦しい生活を精神的に俳句で支えたエピソードがある(222p)。

この地域では軍用地として県内最大規模の3000ヘクタールの広さだった元陸軍演習地高師原・天伯原(高師町・天伯町等)や、試砲場があった伊良湖岬の1400ヘクタールの土地で「緊急開拓事業」が実施され、天伯原には200世帯が入植したが、石が多い上に肥料分が少なく「渥美の不良土」と呼ばれた。

豊川用水について精力的な取材を行い、用水通水50周年記念の連載記事を書いた中日新聞の五十幡将之は、「土が硬くてコンクリを耕すようなものだった。強酸性土壤でサツマイモも親指ほどにししか育たない。最後まで残ったのは三分の一ほどだった」とする、戦後陸軍の練兵場があった天白原(現天伯町)に入植した鳴沢一(80歳)の証言を紹介している(中日新聞2018年6月7日朝刊東三河版18p)。そんな土地での生活の苦しさを句にしてきた松崎さんが、豊川用水が通水したときに心情の安らぎを歌った句(「伊良湖水道静かに迅し月の下」と、それが入選したエピソードも、嶋津は紹介している。

また豊川用水が夢の事業であり、水に苦しんだ人々の生活を助けただけでなく、農業を振興させたことは、具体的な数字として指摘されている。

田原市博物館では、2018年夏企画展「渥

美半島の農業の歩みと豊川用水」で渥美の農業の詳しい歴史を紹介した。そしてまた渥美の農業は豊川用水のみによって振興されたわけではなく、それ以前から農業技術や経営への努力が行われていたことも示した。

1932(昭和7)年、小塩津の農家・岡田儀八が温暖な気候を利用した施設園芸を渥美半島で初めて導入し、それが渥美・赤羽根地域に広がり、通水前の67年にはすでに温室が6300棟以上も立っていた。また旧野田村の村長だった河合為治郎は、1906(明治39)年から4年半かけ、大規模な耕地整理を行って時代に合った効率性の高い田へと生まれ変わらせていた。このような施設園芸への研究と蓄積された栽培技術が土台にあり、それが通水と農村基盤の整備で生かされて、農業の発展につながったとされる。

豊川用水の通水後は広く大規模な灌漑が展開されたが、その効果は、干害の防止に役立って生産性が安定しただけでなく、用水は農業上でも多目的に利用され、畑地灌漑と結び付いた生産技術の進歩と営農の高度化によってその生産が著しく増強され、また畑地農業構造の改善が促進された(江崎1992他参照)。

さらに用水の通水により自由な水利用が可能になり天候に左右されることなく適地適作が行われ、合理的な作付け体系が樹立された。結果、自給自足的だった冬作の麦類、夏作の雑穀やサツマイモ等に代わり、商品性の高い冬作のキャベツ、ハクサイ、ダイコンおよび花卉、夏作のトマト、キュウリ、メロンおよびスイカ等の栽培が行われた。このような畑地農業の発展は、この地域が温暖な気候や東京・大阪ならびに名古屋方面の大市場への輸送の利便に恵まれていたという条件によって後押しされた(高崎2011-2012)。

豊川用水の歴史はこのような地域の農業の努力の歴史とも繋がっており、豊川用水について2018年に地域で上演された演劇『<sup>ほとばし</sup>進る!』(9/22,23豊橋、9/29,30豊川で上演)は、地元

JA も企画を担ったのだが、演劇そのものにこのような以前の農業の努力の歴史が盛り込まれるのは難しかったように思われる。嶋津の記述でもこの点は弱い。

また嶋津は、豊川用水工事に伴い新設される宇連<sup>うれ</sup>ダムにより、地区の一部が水没する三輪村川合（現新城市川合）の住民との交渉は難航していたところを、これを打開した用地担当の原田祥一の機転とアイデアも紹介している（この著書は基本的には政治家と官僚の工夫と努力の側に視点が置かれていて、『プロジェクト X』的である）。中日新聞では、新城市川合の農家林光夫（91 歳）が「戦争からの引き揚げで人が増えたと同時に、食糧難でちょうど畑を開墾したばかりの時だった。イノシシの被害がひどくて見張り小屋を建ててまで大事にしてきた畑。それが水の底に沈むなんて」と当事の住民感情を証言している。交渉の切り札は、「宇連ダム上流にある国有林の払い下げ」で、前例や関連法のない中、用地担当の原田のアイデアが生きたのである（中日新聞 2018 年 6 月 8 日朝刊東三河版 16p）。

とはいえ同じく中日新聞によれば、新城森林組合の組合長、山本勝利（78 歳）は、ダム建設に際して地元で設けた対策委において、早期の補償確定を望む地主と、時間をかけても公共施設設備など地域につながる補償を引き出そうとする非地主に亀裂が生じて対策委が解散し、「足並みをそろえて補償交渉ができていれば今頃この地域は変わっていたはず」と、現地では水源地の現在の没落の基点としてダムが見られていることを紹介している。

このように、五十嵐記者の連載では嶋津が示したような、自由民権運動の影響を受け当事近代日本が貧しさから立ち上がろうとしてきた時代の地域の保守政治の文脈はあまり描かれませんが、一方、嶋津の書には弱いと思われる、現在水源の新城が過疎化のもとで消

滅しかかっている困難や、水源の地域とその恩恵を受ける下流の地域との不可視化されている関係を描いている（なお豊川用水通水 50 周年事業では「水源への感謝」として、水源のことを考えることが大切であると言及している <https://www.youtube.com/watch?v=CvZhg4WeZbc>）。

同様に、五十嵐記者は、ダム工事で死んだ人々、特にその中で慰霊碑に名がありながら詳細が知られていない人々にも目を向ける。

豊橋市雲谷町の二川チェック広場の慰霊碑に名前が刻まれている、用水建設で命を落とした 16 人中、水資源機構に記録が残るのは 1959 年の落盤事故で亡くなった 2 人分だけであり、14 人の事故の詳細はわからない。ダム計画を知って集落を出た戸田政雄（87 歳、新城市豊岡在住）は、工事関係者から幾度となく「昨日、堤防の工事中に死人が出たらしい」と聞き、「身寄りのない作業員も多く、死亡事故が騒がれない時代だった」という（中日新聞 2018 年 7 月 4 日朝刊東三河版 8p）。

演劇『<sup>ほとぼし</sup>逆る！』でも、ダムで沈んだ村の住民と、恩恵を受けた下流の住民の関係を、同じ老人ホームに暮らす老人たちの葛藤として描いていた。またダム事故で亡くなった人についても、登場人物の知人として原作・戯曲に描いており、地域を題材に描く原作・戯曲として、マイノリティと、立場や利害の異なる人々の葛藤を描いた周到に作られた作品になっていた。

地元の JA と組んでこの演劇を手がけた豊橋のイベント企画会社「東雲座カンパニー」は、地元のさまざまなイベントを支える事業を行いながら、豊橋の朝鮮人や豊川の海軍工廠の空襲等についてのマイノリティの視点を持つイベントや出版（これから出版）を手がけてきていたが、地域史に根ざしたこれまでの仕事の底力が活かされていた。演劇も多くの観客に賞賛され地元の文化の豊かさを感じる瞬間だった。原作を書いた住田真理子（57

歳)は、水がない苦勞を「単なる昔話として終わらせたくなかった」「世界を見渡せば、干ばつに苦しんでいる地域は現在もあります」(『<sup>ほとぼし</sup>逆る!』パンフ)として、アフガニスタンから老人ホームに介護の勉強に来た少女の姿に世界と関わる視点を託していた。

なお、8月23日「窓の会」(代表、長谷川哲夫、田崎哲郎、水谷眞理ほか。地域史や地域の課題の研究会。歴代の豊橋市長史等地域史の発掘がなされている)でも嶋津氏の講演がなされた。さらに、9月6日の地域のイベント「もしプラタモリが豊橋に来たら?」の第3弾で、五十嵐記者が講演を行っている(樫村は『<sup>ほとぼし</sup>逆る!』の鑑賞はもとより両方の会に参加した)。

五十嵐記者は、連載において、水道水と異なりいくら水を使っても賦課金が定額ゆえ水の大切さを省みない田原の住民の問題や、全国に比べると緩やかとはいえこの地域でも農家人口減少の中、土地持ち非農家なのに用水の水利から外れるには多額の決済金が必要なため、年金から賦課金を払い続けている地主女性(84歳)の証言、こういった状況を背景として導入されたICT利用の節水技術、休耕田に対する農地バンクの取り組みを紹介したり、自身宇連ダムから伊良湖岬まで100キロを2日かけて走って、サイホン構造によって埋もれている豊川用水を可視化したりしようとした。

五十嵐や住田らの仕事は嶋津の仕事に支えられながらも、若い世代としての新しい視点を持って、郷土の歴史と現在を示している。しかし、彼らが考慮しなかった、本書が示す地域のダイナミックな保守政治家の行為の歴史的・社会的文脈は、明治期からの地域の歴史を俯瞰して現在を考える視点の重要性を示している。嶋津は、バブル期に刊行した『どこで、どう暮らすか日本人』(TBSブリタニカ、昭和64年)で、豊川用水による渥美半島の変貌を、高所得を得て刹那的な貧しい

ゲーム(渋谷の深夜喫茶のマッチ一個を、酔って高スピードで車を飛ばして取ってくる)に熱中する若者に見ていた(本書224p)。国と安倍総理が示す「明治150年」は薄っぺらすぎるが、150年という長期的な地域史を展望する視点は必要だろう。

#### 参考文献

- 江崎 要、1992「豊川用水の通水が地域農家経済に与えたインパクトについて」『明治大学農学部研究報告』(95), p37-60  
高橋哲郎、2011-2012「新・種を撒く人」『水とともに』水資源機構 (<http://www.water.go.jp/honsya/honsya/pamphlet/kouhoushi/topics/toyokawa.html>)